

金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和七年八月一日発行 第二三七号

檀信徒の皆さま、今年も早いものでお盆の月となりました。季節の移ろいとともに、私たち自身の内面にも、様々な「節目」が訪れるように感じます。

私事ではありますが、我が家にとつてこの時期は、息子たちの高校野球にまつわる思い出が色濃く残っています。長男が金池小学校の青いユニホームを着て跳ねる様にボールを追いかけていたのが、ついこの間のようです。勉強と部活を両立させながら常に自ら道を切り開いた長男、様々な人間関係と向き合いながらエースナンバーを掴んだ次男、そして選手ではなくマネージャーとしてチームを支え続けた三男。彼らの姿から、人生には実に多様な形があることを教えてもらいました。一度は甲子園に行けるのではないかと甘く考えていましたが、夢は叶わず、あつという間の十五年間でした。未熟な父親だったと今でも思いますが、あの入道雲に全てを吸い込まれていくようで、少し寂しさも感じています。

さて、七月の法話会では、「心のルーツ解放レター」というテーマで、参加者の皆さまに「親への手紙」を書いていただきました。

金剛宝戒寺では、今年の一月から月に一度、写経の会を行っています。私たちが日々心を鎮めて唱える般若心経には、「空（くう）」の

思想が説かれています。これは「全てのものは固定的な実体を持たず、常に変化し、相互に依存しあつて存在している」という真理です。頭では理解していても、私たちは皆、それぞれに異なる「色メガネ」を通して世界を見ています。そして、その「色メガネ」に大きな影響を与えているのが、幼い頃からの親との関係ではないでしょうか。

人生経験豊富な親が、子を思い様々な言葉をかけるのは自然なことです。しかし、時には良かれと思った言葉が、知らず知らずのうちに子どもを傷つけたり、必要以上の先入観を与えてしまうこともあります。また、私たちは互いに影響し合う存在ですから、完全に影響を与えないことは不可能です。

一方で、子どもの立場からすると、「もつと話を聞いてほしかった」「理解してほしかった」という思いが、心の奥底に残り続けているケースも少なくありません。今回の法話会では、そうした感謝や懺悔、そして伝えきれなかった様々な想いを、手紙を通して改めて見つめ直す機会としました。

当寺の納骨堂には、故人へのお参りに来られた方々がメッセージを書き残せるノートがあります。「人は二度死ぬ」という言葉もあります。肉体的な死とは別に、人々の記憶から忘れ去られた時に訪れる「精神的な死」。手紙を書くという行為は、故人との関係性を再確認するだけでなく、私たち自身の心の中

にある執着や固定観念から解放されるきっかけにもなり得ます。

私自身もまた、親からの期待に応えようと僧侶の道を選んだことは否定できません。しかし、そのことを完全に受け入れられず、人よりも長い反抗期を過ごしました。今にして思えば、父はそんな私を許し見守ってくれていたのでしょうか。大人として自立しているつもりでしたが、父の死を通して、自分がどれほど父に依存していたかに気づかされました。その心の呪縛から解き放たれたのは、父の七回忌を終えた頃だったと思います。今でも毎朝のお墓参りで父に語りかけていますが、ほんの少しだけでも住職になった姿を見てほしかったという思いは、まだ私の心に残っています。今月はお盆の月です。この機会に皆さまもご先祖様やご両親へ心からの手紙を書いてみてはいかがでしょうか。そこには、きつと新たな気づきと心の平穏があるはずです。

八月二十一日（木曜日）十九時から

供養盆踊り 金剛宝戒寺 境内

九月八日（月曜日）十四時から

法話の会「心配事の九割は起こらない」

九月十四日（日曜日）写経の会

九月十日（水曜日）十三時から

巡廻布教 御詠歌講習 金剛宝戒寺

大阪府 放光寺 林恵弘 詠監補